

第六十三回

瀬戸市文芸発表会

特選作品

短歌

【伊吹 純 先生選】

《一般の部》

市を挙げて四郎左衛門景正の八百年祭御輿は続く  
男衆の手締めおはりて不揃ひの湯呑に注げる棟上の酒  
素焼き皿明日の希望を絵付けする五月の空の色を重ねて

瀬戸市ききよう台 加藤 美佐枝  
名古屋市昭和区 清水 良郎  
瀬戸市共栄通 水谷 克行

《小中学生の部》

あついななかセミのなきごえひびいてるセミのいちにちとてもたいせつ

掛川小学校四年 古屋敷 桜匠

【大塚 寅彦 先生選】

《一般の部》

みずからの光ではないのだ月光の静かにそそぐ夜を眺めつ  
自殺者が三万というこの国に笑顔がずらり選挙ポスター  
素焼き皿明日の希望を絵付けする五月の空の色を重ねて

瀬戸市上松山町 梶田 祥子  
奈良県宇陀市 翔のんまな  
瀬戸市共栄通 水谷 克行

《小中学生の部》

冬が来ててぶくろはめて外に出るかぜとおちばとおにごっこする

幡山西小学校四年 加藤 永珠

【松代 天鬼 先生選】

《一般の部》

母の歩に合わせて母の老いを見る  
人生の余白に躍る好奇心  
窯の火に父の誇りが赤々と

名古屋市 中村区  
奈良県 宇陀市  
愛知県 清須市

宇佐美 妙  
翔のんまな  
澄 海

《小中学生の部》

花うえて庭にわたしのひみつき地

水野小学校 三年

中尾 桜子

【浅野 滋子 先生選】

《一般の部》

窯変に命を賭けた半世紀  
シャッターの奥で寡黙になる昭和  
戦場へ駆り出す命なら生まれぬ

瀬戸市 品野町  
瀬戸市 八幡台  
名古屋市 天白区

掛樋 嗣征  
北原 おさ虫  
小原 久美子

《小中学生の部》

お父さんいつもお仕事ありがとう

效範小学校 六年

藤本 琴音

俳句

【中村 雅樹 先生選】

《一般の部》

脱ぎ捨てし軍手びっしり牛膝  
喪の家の戸口に積る桜蕊  
胡瓜もみ一人の昼餉咽せりたり

瀬戸市上陣屋町  
愛知県春日井市  
瀬戸市弁天町

加藤 満智子  
小西 ますみ  
水富 重子

《小中学生の部》

草笛が山の方から聞こえるよ

長根小学校五年

三宅 智暉

【田口 風子 先生選】

《一般の部》

病む母に髪撫でられし聖夜かな  
初音かな靴紐結び直すとき  
教職を退きて色濃きサングラス

瀬戸市西権現町  
瀬戸市北山町  
瀬戸市東山町

榎本 祐子  
加藤 純子  
山本 光江

《小中学生の部》

チューリップさくまでの色ひみつだよ

名古屋市立平針北小学校四年

後藤 愛

俳句

【武藤 紀子 先生選】

《一般の部》

母の忌はいつも枯野の夢ばかり  
筍を掘る老僧は鉢巻きす  
朝顔の芽に声をかけ水をかけ

群馬県藤岡市  
名古屋市北区  
瀬戸市本郷町

千島 宏明  
早坂 貞三  
矢野 さよ子

《小中学生の部》

カゲロウが夏の道路を歩いてる

長根小学校五年

加藤 あい

【佐藤 美恵子 先生選】

《一般の部》

御陶玉を納めし鳥居陶祖祭  
朝取りの若布干したる荒筵  
穴深く照らしはんざき生け捕りに

瀬戸市東本地町  
瀬戸市八幡台  
瀬戸市五位塚町

稲垣 松鯉  
神戸 春子  
玉井 美智子

《小中学生の部》

はるのかぜちいさくつくるひみつきち

名古屋市立平針北小学校一年

後藤 優太

【若山 紀子 先生選】  
詩  
《一般の部》

和の調べ

瀬戸市上品野町

藤 天如

帰宅した ホッ  
玄関に入った キー タン  
居間と応接間を大きく開け放った ズー スー  
風が草と木を連れてきた サー サワサワ  
わたしが歩くと床や畳が追ってきた タンタン ミシッ  
蛇口をひねった シャー  
手を洗った スルスル ピョピョ  
うがいした ココー  
湯を沸かすためガスコンロをつけた シュッ  
着替えをした バサッ スルスル コキッ  
庭を猫が横切っていく・・・  
突然 笛吹きケトルが ピーピー  
さあ お茶を淹れましょう

与那国の旅

福岡県福岡市

六月朔日 光

鉄の雨が降り注ぎ  
血潮の流れ込んだ  
沖繩の海原を神は何処までも  
碧く澄みきった海原に変えて  
遠く遠く与那国までつづく

誰も来ず電話も鳴らぬ与那国を  
まるで過ごすように旅をする私  
川のない島では遠浅の海で  
与那国馬をひと頻り曳き廻して  
馬の興奮を鎮めて厩に戻す  
大夕焼けを使い果たして  
夜も八時半になろうとするが  
上げ船の中で釘を打つ音が聞こえる

《小中学生の部》

鉛筆

水無瀬中学校三年

関 嬉乃

カリカリカリ・・・  
教室中に響きわたる音  
それは鉛筆の音

まろくなつては削り  
まろくなつては削り  
まるで人間の寿命を数直線に表したように  
だんだん小さく減っていく  
そしてやがてゴミ箱の中へ

何だかかわいそうだ

いやかわいそうなのか

筆箱をあけると  
キラキラ輝いている新しい六本の鉛筆

捨てられた鉛筆の命が  
この六本の鉛筆にふきこまれている

人も鉛筆

何度も削られ命が地球上に舞い落ちる  
でも無駄ではない  
次の命にかされるから

鉛筆の命の輪  
私たちが人間の命の輪

似た者同士なのかな

次の命のために

私は今を生きている





